

日印交流の最前線で：東大との生涯にわたる関係を重視し両国の関係強化に貢献するある卒業生の物語

Shrikrishna Kulkarni

インド赤門会会長（1991年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了）

専門分野：ロボット工学、オートメーション

出身国：インド

世界的に著名なマハトマ・ガンディーの曾孫である、シュリクリシュナ・クルカルニ（愛称クリシュナ）は、「世界を見てみたい」という思いから来日し、大学院生に。東大での勉強と経験を活かして、エンジニアリング分野で卓越したキャリアを形成。現在は母校への恩返しの意味で、インド赤門会会長として、東京大学および日本の大学全般にインド人留学生を増やすため尽力。東京大学インド事務所の創設者の一人でもある。

世界を見てみたい

クリシュナは、西インドのグジャラト州の一都市アフマダバードにある大学のキャンパス内で育った。父親がその大学の教授を務めていたのである。インド空軍のパイロットになるのが夢だったが、家族や友人には80年代初頭のインドで花形産業であったエンジニアリングを勧められた。電気工学で学士号を取得するとムンバイの企業に就職。しかし、若かりしクリシュナには世界を見てみたいという思いがあった。当時のインドのほとんどの若者にとって、外国に行く唯一の道は大学院への進学だった。父親の同僚は、クリシュナがロボット工学やオートメーションに関心があるのを見て、日本の大学院への進学を勧めた。子供の頃日本を訪れたことのある彼は思った。「悪くないな。」こうして茅陽一東京大学工学部教授（当時）に紹介された。茅教授から研究生として電気工学部の研究室への受け入れを許可されると、1988年1月に来日。当初は下宿探しもままならず、最初の数ヶ月は神保町の老夫婦のところに寄宿した。

日本では身寄りもなく日本語もほとんど分からなかったが、正規生になるためには五教科からなる大学院の厳しい入学試験に合格しなければならなかった。準備不足ではあったが、クリシュナはこう語っている。「人はそのような困難な状況や逆境に置かれると、必然的に力をつけるものです。」実際、彼は力をつけた。勉学に全エネルギーを注いだ結果、合格しただけでなく、その年の最高得点者に名を連ねることもなった。この報を受

けて、自転車で神保町に帰ると老夫婦に報告した。「すると、二人とも泣き出したのです。それまで、日本人が東大をどれぐらいすごいものだと思っているか、知りませんでした。そして、おじいさんは、私を近所のたばこ屋や八百屋、魚屋、パチンコ屋などに連れ歩き、皆に私が東大に受かったと触れ回ったのです。まさに一大事でした。」こうして彼は、研究室の修士学生となり、オートメーションやロボット工学の主要分野である制御エンジニアリングを専攻することになる。

教授の的確な指導

茅教授と堀洋一准教授（当時）の名前から取られた茅・堀研究室では、20名ほどの学生と職員のうち、クリシュナ以外は全員日本人であった。来日のタイミングや勉強の大変さ、研究室の遠さなどが相まって、他の留学生との交流の機会がほとんどなかったが、研究室が彼の家族であった。一緒に旅行に行ったり、堀准教授（当時）が夕食に招待してくれたりもした。「日本の師弟関係は、ただ単に教科を教わるだけのものではありません。人間としての成長を促してくれ、学生の人生に大きな影響力を与えるのです。」

クリシュナは就職の際に、この師弟関係の威力を経験することになる。茅教授は世界的に有名な日本のロボット会社であるファナックの稲葉清右衛門会長（当時）に彼を紹介してくれた。富士山近郊にあるファナック本社を訪ねて稲葉会長に面会したクリシュナは、茅教授の推薦に従いファナックに就職することにした。

インドへ



ファナック入社後本社勤務が3年ほど続いた頃、稲葉会長から突然クリスマス・ディナーの招待を受けた。食事中に会長から言われたのは、研究開発部門からマネジメント部門に移ってほしいということであった。その後立て続けに、ファナックの全部門を経験することになる。約一年間の集中研修が終わったある日、会長が姿を現し、インドに戻ってファナックを立ち上げて

欲しいと告げられた。30才でインドに戻り、31才でファナック・インディアのインド代表

兼マネジング・ディレクターに就任。10年間でファナック・インディアを世界最大規模のファクトリー・オートメーション会社に仕立て上げた。

帰印前日、稲葉会長と茅教授と三人で食事をした。そこで、稲葉会長が茅教授に、クリシュナに何か与えたい課題はないかと尋ねた。すると茅教授は、クリシュナが日本語を忘れないようにしてほしいと答えた。そこで稲葉会長は、クリシュナに、毎週ファナック・インディアの事業報告を手書きの日本語で提出させるという課題を課した。クリシュナは10年間欠かさずそれを行った。「本当に大変な学びでした。ただ、そのお陰で力がつきました。何年経っても日本に戻ってくると、自然に日本語が口をついて出て来るのです。」

東大からの提案

ファナック退職後数年が経ち、バンガロールのパナソニック・インディアのインド代表を務めていた2008年頃に、東大職員であるという日本人男性吉野宏が会社を訪れ、面会を申し込んで来た。吉野が東京大学の職員であると聞いて、直ちに面会を許可した。吉野は東京大学にインド事務所開設の計画があると語り、アドバイスを求めてきた。クリシュナは素晴らしい提案だと思い、バンガロールに事務所を開設してはどうかと提言した。2012年、クリシュナの支援で東京大学インド事務所が開所した。

文部科学省は、東京大学インド事務所を、東京大学を含む日本の大学のインド人日本留学拠点と定めた。クリシュナは東京大学インド事務所の活動の一環として、吉野とインド各地の大学を訪問、自身の経験談を語り、日本を留学先に選択したことでどのように人生が変わったかを語った。「インド人には、米国やヨーロッパに行く場合のロール・モデルはたくさんありますが、日本に関心を持つ人間にとってのロール・モデルはほとんどありません。ですから、私が喜んでその場に立ったのです。」

また、東京大学のインド同窓会（インド赤門会）設立も支援した。

2012年にインド赤門会の初代会長に任命され、2015年まで務めた。その後、過去の実績と日本に対する知識を理由に、2018年に再び会長就任を要請された。クリシュナは「愛の労働」と称して、これを受託した。「大学はどんな一個人よりも大きい存在です。つまり、東大はある意味母のようなものです。自分の母親を拒絶することはないでしょう。ですから私も、心情的に東大から頼まれたことは拒絶したくないのです。」

東京大学インド事務所は「東大のインド・ビジョンの先鋒」であり、インドの卒業生ネットワークはこのビジョンを実現するうえで不可欠な存在だ、とクリシュナは語る。インド赤門会の活動には、東大生のインド体験活動プログラムの支援やインドの日本留学説明会に東京大学の代表として参加することなどがある。また、100名強のメンバーを抱えるインド赤門会は、年2回会議を開催し、ネットワーキングや卒業生活動の報告を行っている。

東京大学は毎年10月にホームカミングデイを開催しているが、この日は海外の卒業生も参加し、大学時代を懐かしみ、各種講演やイベントに参加する日となっている。

2019年、クリシュナは東京大学より、ホームカミングデイのマハトマ・ガンディー生誕150周年記念イベントで講演を行うよう依頼された。「また来ましたか。東大から頼まれたら厭とは言えませんね。」彼はこの言葉を繰り返し口にする。東京大学から招聘されたことを名誉に感じ、2019年ホームカミングデイでは200名ほどの聴衆を前に、ガンディーの人となりとその今日の世界における意義について講演を行った。



2019年ホームカミングデイで講演するクリシュナ。

講演のビデオはこちらから。<https://todai.tv/contents-list/2019FY/Gandhi-150/02>

深い感謝の念

クリシュナの東大愛は過去数十年にわたり不変のものであるが、その東大との関係は進化を遂げ、今では感謝の思いになっている。「今の私の一番強い思いは感謝の念です。ですから、恩返しをしたいのです。東大に恩返しできる機会があれば、できる限りそうします。東大に何らかのメリットがあることを提供したいのです。」

東京大学は、東京大学インド事務所やインド赤門会などでクリシュナの活動の恩恵を受けている。クリシュナをはじめとする赤門会のメンバーの尽力もあり、2012年に29名（日本全体で541名）だったインド人留学生が2018年には92名（日本全体で1,607名）と約三倍にまで増加した。彼はこの数字をさらに伸ばしたいと思っているが、一方では、大学側も厳しい目標を設定するだけでなく、自助努力をする必要があると警鐘を鳴らす。大学は、数字やすぐに結果を出すことを重視するビジネスとは異なり、数十年、数百年の時間枠で運営されるものであり、長期のファンダメンタルに焦点を当てる必要がある、とする。「大学教育はビジネスとは異なります。生涯にわたる関係なのです。ですから100メートル走のようなものとして見てはいけません。むしろマラソンのようなものなのです。」

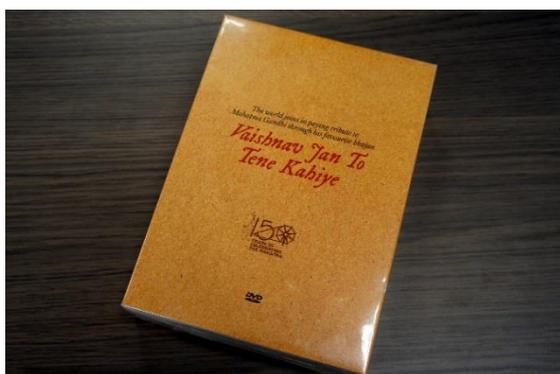
留学生への提言

クリシュナは自身の経験を振り返って、日本留学の際に心がけるべきことを二つ挙げている。一つは、日本に来るといのは自分で決めたことであるということをお忘れずに、日本にいる間は良いものに目を向けるようにする、ということである。「自分で蒔いた種は自分で刈り取ることになります。たとえば、目の前に 50 個の種があるとすれば、どの種を植えて木に育て上げるか、ということです。皆さんは私の場合のように、あらゆる経験を経験することになるでしょう。その中のどの経験にフォーカスするかは、皆さん次第です。」

また、クリシュナは、日本語の習得が最優先だとも言う。今日ではわざわざ外国に行かなくてもオンラインで授業を受けることができるので、「実際に日本まで来て何を学ぶか？それは、人と人との交流です。現地の言葉が分かれば、その交流はかけがいのないものになります。あなたの人生のあらゆる側面を見る窓を与えてくれます。まずはどっぷりと浸りきることです。それに尽きます。それ以外は東大が教えてくれます。」

Vaishnav Jan To Tene Kahiye

150ヶ国のアーティストがガンディー生誕 150周年を記念して歌うガンディーの愛唱歌



クリシュナは、インド政府から届いた限定版 DVD を日本に持参した。マハトマ・ガンディー生誕 150周年を記念して製作された DVD で、150ヶ国のアーティストがガンディーの母語であるグジャラト語でガンディーの愛唱歌であったバジヤン、すなわち賛神歌「Vaishnav Jan To Tene Kahiye」（「ビシュヌ神の帰依

者」）を歌っている。

歌の歌詞はガンディーの心情に近いもので、徳の高い生活を送る者の特徴について述べられている。彼は、多くの人がこの歌の力強くユニークな演奏の恩恵を受けられることを願い、ホームカミングデイにこの DVD を五神総長に手渡し、図書館への寄贈を申し入れた。

空・愛・美

「この三文字があれば、他には何も要りません。」



好きな漢字は、空（から）と愛（あい）と美（び）の三文字である。クリシュナはそれぞれの漢字を書きながら、その字の解釈を説明した。何か新しいものを受け入れるには、心を「空」っぽにしなければならない。「愛」は、説明するまでもなく人生にとって不可欠なものである。そして、すべてに「美」を見いだすことができれば、人生は素晴らしいもの

になる。「この三つさえあれば、他には何も要りません。」

インタビュー/テキスト ウィットニー・マッシュューズ